



ただ患者さんを守りたかった

たかの みお
高野 己保 さん
(医療法人社団養高会 高野病院 事務長)

平成23年3月12日、最初の大きな地震の翌日、ラジオで原発事故のことを知りました。しかし、院長が「病院はコンクリート造りで、3月は南から強い風が吹いているから大丈夫」と判断し、避難せずに患者さんを守ることにしました。到底避難に耐えられない重症者もいたからです。

人と物があれば治療は続けられますが、スタッフの一部が家族と避難し、隣接のいわき市への物流が止まりました。

スタッフは、100人の患者さんに対して10数人で、疲労はピークに達していました。それでも医療の質を落とさないために、まず精神科の患者さんを、次に動かせる内科の患者さんを県外の医療機関へ移送し、

残った重症者の治療に全資源を集中しました。

残ったスタッフなら患者さんは守れると信じていましたから、どうしたらスタッフを守れるかを考え、微弱な電波を頼りに東京の病院へ「スタッフを守ってほしい」とメールを送りました。一度避難したスタッフが戻ってくるという大きな支えもあり、治療を続けることができました。

今だからこそ、無理な避難で重症者の命を危険にさらさずに済んだと言われていますが、待ったなしの決断であり、避難するのとどちらが正しい判断だったかは分かりません。ただ、すべては「患者さんを守りたい」という一念でした。



今日我慢すれば、 明日はいいことがある

たむら こういち
田村 弘一 さん
(林業(震災当時))

東日本大震災までは林業を営んでいて、平成23年3月11日はいわき市久之浜町末続の作業場で何人かを仕事させていました。

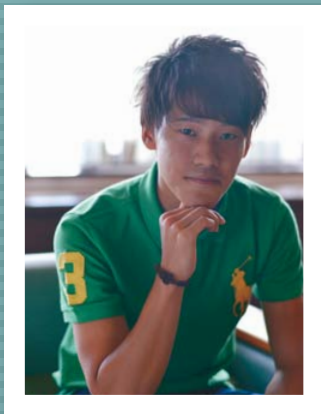
建屋がものすごく揺れ危険だったので、全員を安全な場所に避難させました。停電して仕事にならないので、火の元を確認してから従業員を車で送り届けて帰宅しました。携帯電話はつながりませんでした。

私は広野町消防団の分団長で、大津波警報の防災無線で集まってきた分団員から、近所の人海沿いの住宅で1人残されていると聞いたので、若い団員を連れて向かいました。すれ違った役場の広報車から第2波が来ると言われましたが、迷うことなく向かい、2階に取り残された2人をおぶって連れ出しました。ほかにもびしょ濡れになった5、6人を見つけ、消防車で公民館へ避難させました。翌12日は、海の方へ行かないよう、バリケードを張って警備し、2班に分かれて3人くらい

た行方不明者の搜索をしました。正午ころ、そのうちの1人が墓につかまって亡くなっているのを発見しました。

夕方、災害対策本部で原発事故のことを聞き、消防団長からは残ることを強制しないので分団ごとに話し合っていると告げられました。私の分団はみな若く、自分以外は全員避難させました。数台の消防車で手分けして、夜1軒1軒回って避難を確認しました。13日の夕方までに7、8割移動し、14日の朝方には町の職員を含め小野町に避難しました。

林業は、仕入先の山が警戒区域に入っていたので、取引先から断られ、未だ再開することはできません。現在は、応急仮設住宅の管理人をしています。しかし、自営業だったのでこれまでも浮き沈みはありました。後世に伝えたいのは、今日我慢すれば明日は何かいいことがあるんじゃないかと自分に言い聞かせること。家族の中にそう思う人が1人でもいれば、踏ん張れます。



そろいのユニホームでつなぐ 故郷への思い

たむら しょうご
田村 章悟 さん
(広野中学校2年生(当時))

私は、東日本大震災が発生したとき、広野中学校の2年生でした。平成23年3月11日は、3年生の卒業式が終わり自分の家で横になっているときに、地震が起きました。小さな揺れが時間とともに大きくなり、お皿とか時計とか全て落ちて割れ、驚いて外に逃げ出しました。初めての経験で、独りのときだったので、どうしていいか分かりませんでした。部活動はバドミントン部に所属していました。しかし、震災で自分の学校に通うことができなくなって、チームもバラバラになってしまい、転校した先で練習には参加させてもらいましたが、違和感がありました。

結局3年生の大会は、残念な結果に終わってしまい、悔いが残りました。だから、高校に進学したとき、中学時代の悔しい思いをはらせるよう活躍しようと、迷わずバドミントン部に入部しました。

広野町出身のバドミントン部員は、自分たちの代になったら、そろいのユニホーム

を作るのが、先輩から引き継がれた伝統です。

進学した高校はいわき市内の4校に別れていますが、先輩に倣ってそろいのユニホームを作るため、みんなで話し合うために集まったとき、震災以来久しぶりに顔を合わす友だちもいて、うれしかったです。

背中に「東北に春を告げる町 広野」という文字が入ったユニホームが出来上がってきて、袖を通したとき仲間との一体感を感じ、士気が高まりました。3年生での県総体では、地区大会でダブルスが3位、シングルスがベスト16という成績を収め、県大会に出場することができました。

震災が起こる前は、将来スポーツに関わる仕事に就きたいと思っていましたが、震災後、復興の仕事がとてもやりがいのある仕事に思えてきたので、地方公務員を目指して、行政学などを学べる学部への進学を希望しています。



一日も早くすべての町民が 広野町で暮らせるように

ど い はる み
土井 治美 さん

(岐阜市派遣職員(平成24年4月~25年3月))

私は、平成23年度末をもって岐阜市役所を定年退職となりましたが、その直前に全国市長会のホームページで被災地の多くの自治体においては、人材不足のため復興事業が思うように進まないことを知りました。現職のときは、被災地の応援をしたくても自由にならない状況にありましたが、退職後、再任用という身分で被災地へ派遣してもらえれば、腰を据えて仕事ができると考えました。

そこで、平成24年3月10日に、事務職の応援職員を求めている広野町を日帰りで訪れ、町の担当職員から話を伺うとともに、町内を案内していただきました。広野町は、その10日前の3月1日に役場機能をいわき市から本来の庁舎に戻したばかりで、庁内は雑然としていましたが、その中で土曜日にもかかわらず多くの職員が出勤して仕事をしておられたことを、鮮明に覚えています。

広野町在任中に、町民の皆さんが帰還しようと思えるには「医・食・住」の不安を解消することが重要だと感じていました。

私が離任してからの2年間でこれらに対する町の環境が改善されたことをニュースなどで知るたびに、一人でも多くの方が町内に移り住んでもらえるものと思っています。

私は、広野町の小中学校で学ぶ子どもた

ちの姿を幾度か見せていただきましたが、最も印象に残っているのは、広野中学校の平成24年度震災復興祈念集会での生徒会長さんの次の言葉です。「私は、この広野中学校からできることを精いっぱいしていきたいと思います。みんなで協力すれば、広野町の復興も一段と早く進むことでしょう。」。このように考えている子どもたちがいる限り、広野町のより早い復興は間違いないと確信したものです。

現に、私が着任した平成24年4月には、本格的な除染が始まったばかりで、町への帰還者は、300人にも満たない状況でしたが、今では2000人近くまで増えているようです。これから、町の様子は復興事業で大きく変わっていくと思いますが、そこで暮らす町民の皆さんの絆が震災前のように強く結ばれていれば、以前にも増して住みやすい、また、活気のある広野町となることと思います。

震災から4年が経過し、風化という言葉が聞かれますが、私も微力ではありますが、福島現状を少しでも多くの人に知ってもらえるよう、岐阜で努力していこうと思っています。一日でも早く、すべての町民の方が、広野町で暮らす日が来ることをお祈りします。



津波のすごさを目撃した

にい つま つね たか
新妻 常敬 さん
(自宅で被災)

平成23年3月11日は、午前中広野町体協グランドゴルフ部会の総会が開催され、帰り道にガソリンを満タンにして帰宅しました。遅い昼食を取り、妻とテレビを観ているときに地震が来て、横揺れが長くて家の中には怖くていられなかったので、家の外に出て木につかまっていた。揺れが収まり家の中に入ったら、家の中は食器、額、人形などがすべて落ちて、物をどけなければ歩くこともできませんでした。2階は子ども部屋で、書類、テレビなど全て散乱し、どうしようもありません。

自宅のある高台には、津波が来るということで久保本町地区の人が上がってきました。

第1波は、浅見川河口にある工事中の浜街道を乗り越えて巻き上がる感じで、真っ黒な波がグーッと押し寄せてきたのが眼下に見えました。まず軽トラック数台がお寺の裏側の農地の低い方に流れてきて、続いて家屋の屋組が瓦を載せたまま流れてきました。また、津波で壊された住宅すべてが押し寄せてきたのです。沖を見たら何メートルか非常に高い真っ白い帯状の波が押し寄せてくる様は言葉にならない様子でした。その後ろにも一直線に波が押し寄せてきていました。自宅の上にある旅館「日の出別館」の2階に上がって、波が引くのをじっと見ていましたが、引き波の強さはすごいものでした。

引き波と共に人がどんどん上がってきて、体育館や公民館に避難していました。自宅は停電しませんでした。街中は停電で暗く気持ちの悪い一夜となりました。余震が怖くて車に座布団、毛布、湯たんぽを持って行って寝ました。水道は止まりました。

翌12日の午後、町の防災無線で南西の方向に逃げるよう放送がありました。2、3日で帰ってこられるだろうと思い、下着1枚くらいを持っていわき市好間のいこの家に行きました。そこでテレビから原発事故などの情報を得て、必要なものを取りに一度自宅に戻りました。同月16日に息子のいる福島市に避難しましたが、二本松市にいた友人からパークゴルフに誘われ、気分転換ができました。翌月4月の23日に二次避難所である東白川郡塙町のゆうゆうランドに移り、ここではグランドゴルフ、お風呂、散歩などで気分転換をしていました。最後にいわき市常磐迎の応急仮設住宅に移りました。

自宅の庭には1万球のサギソウを栽培していましたが、避難で全滅しました。大熊町にある先祖の墓参りができないこと、妻が集団生活になじめなかったことなど、避難生活はつらいものがありますが、いわき市の人にはお世話になっております。一日も早くわが家に帰りたいとの思いで過ごしておりますが、いつの日になるのでしょうか、自分でも分からない現況です。



一刻も早く町を元に戻したい

にしもと のぶ お
西本 信雄 さん
(広野町建設業組合 組合長)

平成23年3月12日、前日の地震に伴う復旧作業をしていた時に福島第一原発事故が発生し、避難を余儀なくされました。その後は報道で流れる情報を聞きながら町へ戻る時期を考えていましたが、避難後3週間も過ぎようとしていたところ、避難先の町役場から連絡があり、「広野町の被害状況を調査するために主要な場所・道路などのがれき類を撤去してほしい」と依頼を受けました。そのため、避難中の各組合員に連絡し、作業員の確保、資機材の確保をお願いしました。当社でも、避難中の従業員と何とか連絡を取り、「広野町の復旧作業をするので、戻って仕事をしてほしい」とお願いをしました。

そのころの町内では、水道は復旧しておらず、一部電気もなく、また従業員の中には警戒区域のため自宅に入れず、臨時の住

居を用意しなければなりませんでした。何とかいわき市四倉町に社員が寝泊まりできる場所を見つけ、従業員を確保し作業を開始したのです。

復旧作業の4月は、がれき撤去、道路や下水道の調査などを行い、現況を把握し、各組合員とも連絡を取り合い、広野町の被災状況を改めて振り返り、震災の凄まじさを感じました。5月からは、本格的にがれき撤去、倒壊家屋の片付け、道路などインフラの復旧に取り掛かることができたのです。

4年近く経過した今、町は以前の様子を取り戻しつつありますが、引き続き帰還のための復興作業が継続していますので、これからも組合員と共に協力し、復興を加速し、双葉郡復興の最先端として頑張りたいと考えています。